



Seishokaichi Style Cambridge English

## 検定教科書『Cambridge Experience 1』

### 「Beyond the classroom, empathize with the world! 教室を超えて、世界と共感しよう」を体現する授業実践例

鶏鳴学園青翔開智高等学校(鳥取)

英語科 石田直也先生

(2023 年春)

#### ○導入の背景

本校の英語科では、「Beyond the classroom, empathize with the world! 教室を超えて、世界と共感しよう」をモットーに、Capacity(英語に共感する力、英語で共感する力)・Knowledge(4 技能を支える語彙・文法・文化理解)・Mind(自らの「今」と「将来」を世界的視野で捉える力)の育成に取り組んでいます。

この度ケンブリッジ大学出版から検定教科書として『Cambridge Experience 1』が出版されることを知り、内容を確認したうえでほぼ即決で採用に至りました。というのも、以前使用していた教科書はグラマーベースで、

- ・与えられる会話とトピックに関連性が薄い or バラバラ
- ・導入パートがなく、新出単語 ▷ 本文 ▷ 文法解説という構成
- ・内容に関連するアクティビティが少ない
- ・文法解説が多い

であり、毎回の授業では生徒の興味を惹くようなリードイン作成、関連する動画探し、リスニングやリーディングの gist & detail questions を考え、なるべくコミュニカティブな授業になるようにしていましたが、かなり膨大な時間がかかっていました。そのため、まずはケンブリッジ大学出版の『Prism Reading』に変更し数年使用していましたが、新たな検定教科書が出るということでこちらに切り替えをしました。

#### ○教科書について

『Cambridge Experience 1』はユニットごとにトピックがあり、その中で必要な語彙や表現、文法を身につけていく形式になっているので各ユニットで一貫性があり、非常に教えやすいと感じています。教える側も「なるほど！」となるようなトピックに加えて、TESOL(英語教授法)や CELTA(国際的な英語教授法資格)で推奨されているコミュニカティブ・アプローチを前提に作成されているため、教科書をそのまま扱うだけでも求めていた授業を展開することができます。

また、ユニットごとのトピックに沿って 4 技能を横断的に学ぶ構成になっているため、オーセンティックな英語を技能ごとに分断することなくシームレスにインプットできるところが魅力だと感じています。日本の英語教育では往々にして言語形式と意味内容については説明が豊富ですが、コンテキストや状況など「いつ」「どこで」「何のために」その表現や文法が扱われるかという言語機能については言及されないことが多いと感じていました。しかし、本書では予めトピックが与えられていることから、どのような場面で使われるかという部分を自然な形で触れることができるということも個人的におすすめのポイントです。

加えて付属の素材が豊富で、ユニットごとのリスニング音源に加えリードイン用の動画まであり、強いこだわり



りが無ければそのまま使うだけで授業の導入ができてしまいます。さらに巻末には付録として、CLIL やライティング、語彙、文法のエクササイズもついていて本校では各ユニットの最後にボキャブラリーエクステンションのパートを解く時間を設けていました。

## ○クラスの様子

クラスは習熟度別の2クラス編成(アドバンスト・スタンダード)で各クラス 27 人前後です。レベル感として、アドバンストクラスは CEFR A2~B1 でスタンダードは A1 でした。今年度受け持ったクラスはアドバンストで、自力でスラスラ教科書を読み込める層と若干のフォローアップが必要な層が混在していたため、授業はペアワーク・グループワークをたくさん取り入れお互いの知識や理解度のギャップを埋めるように意識していました。

授業は基本的に本校の Native Language Teacher と Japanese Teacher of English の 2 名体制で、メインの進行を NLT が行い、細かい解説などを JTE が行っています。授業の内容に関しては適宜打ち合わせで内容やアクティビティを確認し役割を交代しながら授業をやっています。ただ教科書を読み問題を解くだけでは教科書が持つ利点を活かさないで、コミュニケーションな授業を展開することやミニプレゼンなど創造的なアクティビティをすることなど共通認識を持って授業を展開することができたのは非常に良かったです。

はじめは設問も含めてすべて英語で書かれた教材に面食らっていた様子で、そもそもの設問の意味がわからず手が止まってしまう生徒もいましたが、設問や選択肢の確認をペアでさせてから問題に取り組ませるなど足場掛けすることで、想定していたよりも早く慣れた様子でした。全て英語で書いてあるというハードルはあるものの、テキストに含まれる文法自体は中学校で習ったものがほとんどで、一度習ったことを英語でもう一度理解するという点や使用されるテキストの文構成がシンプルで、文脈から推測しながらよく読めば無理なく理解できる点が生徒たちにとって「i+1」の状況を生み出していると感じました。

一方で、使用される語彙や表現は豊富でそのまま海外の生活で使えるレベルであるがゆえに、生徒のレベルを超えているものも多くありました。生徒は一人 1 台 iPad を持っているため、知らない単語をすぐに調べていましたが、次年度以降は教科書にある単語のエクササイズのほかに語彙力強化のアクティビティを入れたいと思っています。



## ○授業実践

ここで【探究スキルラーニング】として実践した内容を共有したいと思います。

本校では、学校図書館を情報ハブとして探究スキルラーニングを行うことで各教科の授業と探究基礎の授業をつなぎ、教育課程全体を通して探究活動の質を向上させることを目指しています。

探究活動は「特別な時間に実施する特別な学び」ではなく、「普段からすぐ側にある学び」であり、探究活動によって培われる課題発見・課題解決に必要なとされる資質やスキルは、これからの社会を生き抜く生徒たちにとって非常に重要なものであると学校全体で考えています。

今回紹介する内容は探究スキルラーニング授業の一環として行ったものです。普段習熟度別に分かれている2クラスの生徒が合同で二学期に取り組んだもので、Unit 4 Appearance の「Describing trends」の内容を発展させ、ファッションにまつわる実際のグラフを読み取り、グラフを描写する活動をしました。

## 1. 目的

本校では、自ら決めたテーマに関して、高2の最後に個人研究のポスター発表と論文を書いており、この活動が探究活動の集大成となります。しかしデータを貼り付けたまま本文中で言及していない、そもそも読み方を間違えているなどの課題がありました。そこで英語の授業中で探究に不可欠な「統計的に処理されたデータを考察し言語化する力」を伸ばすため本授業を実施しました。生徒にとって Writing はなかなかハードルが高く、ロジカルに書くとなるとさらに難しいものです。そこで、IELTS のライティング Part 1 のグラフを読み描写するタスクを参考にしながら以下の目的を設定しました。

### ①探究スキルラーニングの観点：

探究に必要なスキルの1つである統計的に処理されたデータを考察する力を鍛える

### ②英語科の観点：

新学習指導要領にもある「論理性に注意して伝えて書くことができる力」、Writing 能力を鍛える

## 2. 準備

事前準備として、探究スキルラーニングの実施前には必ず担当教員と探究スキルラーニングのハブである図書館司書と授業の打ち合わせを行います。今回は授業の目的やスケジュール、ルーブリック内容に合わせて今回の肝であるグラフの選定について共有をしました。実際の打ち合わせの様子は[こちら](#)。

本校の探究スキルラーニングの評価は「ルーブリック」を用いた評価を採用しています。これは教員評価の基準であるとともに、生徒自身の到達目標としての機能も持ち合わせています。青翔開智の「育てたい資質」と「評価項目」を参照し、担当教員・司書との打ち合わせの際に「教科として達成してほしいこと」と「探究の質を高めるために習得してほしいスキル」のすり合わせの上でルーブリックに落とし込んでいきます。この「育てたい資質」と「評価項目」はスキルとコンピテンシーの2つから成り立っていて、職員室や校内への掲示や生徒への配布を行っています。青翔開智の「育てたい資質」と「評価項目」は[こちら](#)。

「育てたい資質」と「評価項目」は教員間で共通言語としての役割も果たしているため、司書を中心に教科横断しながら英語を含めた各授業でルーブリックを用いた探究スキルラーニングを展開しています。同一のテーマを複数の教科にまたがって行う教科横断ではなく評価基準がすべての教科に広がっているところは探究スキルラーニングの特徴と言えると思います。

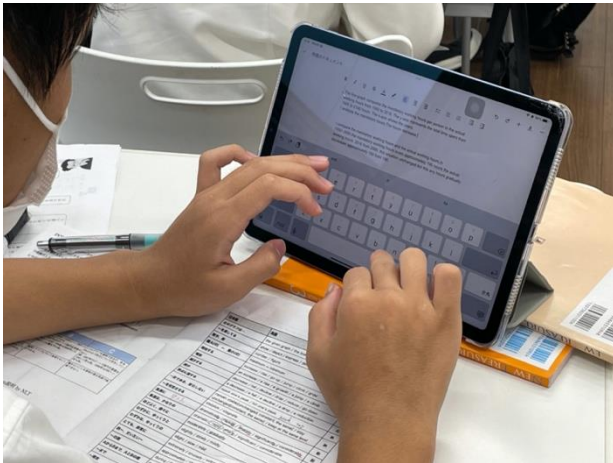


また、今回の活動では実際のグラフが必要だったため図書館司書と連携し、複数の資料の中から 5 つのグラフを提示してもらいました。「衣類供給量の推移」や「衣類の平均価格の推移」「国内靴下生産量の推移」など今回のトピックにまつわるグラフを生徒に提示したことで、生徒が興味・関心のあるものを自ら選び決定する流れができたことが良かったです。

### 3. 実施

本授業は大まかに以下の流れで行いました。

- 1 コマ目 : 教科書でグラフ表現のインプット ▷ IELTS 練習問題で構成のインプット
- 2 コマ目 : ルーブリック提示 ▷ 5 つのグラフ提示 ▷ グラフ決定・分析
- 3 コマ目 : ライティング ▷ チェック(教員+Grammarly)
- 4 コマ目 : 見直し ▷ 提出 ▷ 自己評価



生徒の活動の様子

授業は 1 コマ 45 分で、今回は 4 コマで行いました。ライティングは Google ドキュメントで行い、Google クラウドルームに提出してもらいました。ライティング活動中はジャパンレッズ School や Grammarly といったツールを利用することで自律してライティングに取り組めるように意識しています。



p. 47 Unit 4 Appearance ACADEMIC SKILLS



生徒の成果物

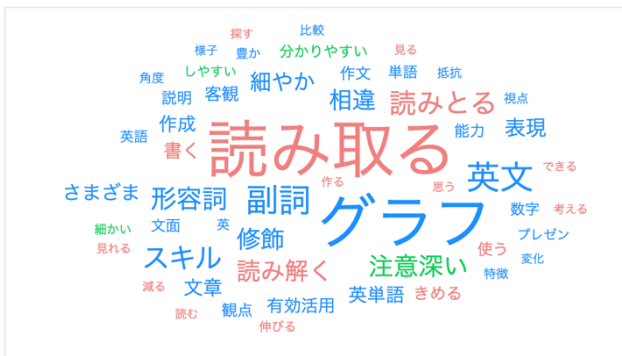


## 4. 評価

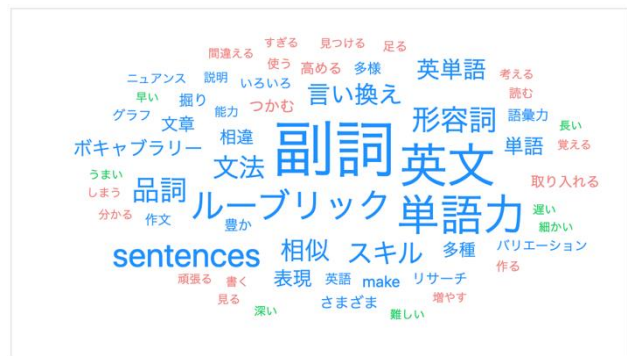
さきほども少し触れましたが、探究スキルラーニングの評価はルーブリックを用いて行います。ルーブリックは探究スキルラーニングの導入時に生徒たちにも提示し、生徒たちは成果物の提出の際に自己評価の基準として使用しています。今回は 2 種類のグラフの変化に言及し、その相違点や類似点の比較ができていれば A 評価をつけることにしました。また、英語力の評価として、グラフの変化を詳細に描写するため、効果的に副詞・形容詞・動詞を使い分け、用いることを評価対象としました。教員が示した「見本・例文」等を参考にしながら取り組めば、ルーブリックの到達目標を達成できるようにデザインしています。右の表は今回使用したルーブリック評価表です。

タグ	観点 (到達目標)	A	B	C
11	統計的に処理されたデータを考察することができる	Bを踏まえ、2つのグラフの変化について相違点や類似点などの比較をすることができる。	2つのグラフの特徴すべき変化について数字と共に説明することができる。 例) 2007年のジーンズ国内生産量は100トンだが、2年後の2009年には200トンに増えている。	2つのグラフを説明できるが、ある時点のみで変化について言及していない。 例) 2007年のジーンズ国内生産量は100トンだった。2009年は200トンだった。
15	思考的確な文章で表現することができる	副詞や形容詞を効果的に使用したり、動詞を変えたりして豊かにグラフについて表現することができる。	簡潔にグラフについて表現することができる。	書きたいことを意味が通る英語で表現できない。

生徒はルーブリックによる自己評価と合わせて、探究スキルラーニングを通して「伸びたスキル」と「自分に足りないスキル」についての振り返りをしてもらっています。下の図は今回の活動後に答えてもらったコメントをテキストマイニングしたものです。



生徒が伸びたと思うスキル



生徒が不足していると感じるスキル

## ○まとめ

『Cambridge Experience 1』を採択したことで、生徒たちは刺激的で知的好奇心をくすぐるトピックを通してオーセンティックな英語に触れることができている。このような良質な英語にさらされる経験はチャレンジングであると同時に、生徒の中の興味・関心の種まきにも大きく寄与していると感じています。

ことばを通して異なる文化や考え方、新たな価値観に触れ、世界と共感する力を身に着けていってほしいです。私自身も一英語学習者として自分自身が楽しめる授業をすることで、生徒たちの英語力向上に寄与したいと考えています。